

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

|            |   |
|------------|---|
| Title      | 現代中国における高齢者問題の諸相  |
| Author(s)  | 馬, 咏倩   |
| Citation   | HABITUS , 22 : 105 - 119  |
| Issue Date | 2018-03-20  |
| DOI        |   |
| Self DOI   | <a href="https://doi.org/10.15027/45628">10.15027/45628</a>                                       |
| URL        | <a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045628">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045628</a> |
| Right      |   |
| Relation   |   |



# 現代中国における高齢者問題の諸相

馬 咏 倩

(広島大学大学院文学研究科博士課程前期)

## 目次

はじめに

第一章 中国高齢化社会の現状

第二章 高齢者観への影響

第三章 高齢者の諸問題

第四章 高齢者問題への対策

おわりに

## はじめに

中国社会は、膨大な規模の高齢者人口、急速な高齢化、経済成長を遂げる前に高齢化社会に突入したことなどの特徴を持つ。これらは中国で実際にさまざまな高齢者問題を引き起こしている。これを解決するために、今後、高齢者医療保険制度の改革や高齢者社会福祉の整備と充実などの課題に早急に取り組む必要がある。

こうした政策や制度から見た高齢者問題も確かに重要であろう。しかし本論ではこれとは異なった角度から、現在、中国で注目されている高齢者に関わる社会問題を検討する。今の時代の高齢者たちは、物質的にも文化的にも貧困な苦難時代を経て、経済優先の発展戦略と一人っ子政策の影響を受け、工業化と都市化による激動の時代を生き抜いた人々である。そのような高齢者たちをど

う扱うべきかが今問われている。昔から敬老文化と「孝」の文化は中国伝統文化の重要な部分であり、若者たちに対して早くから敬老思想の教育が施される。敬老思想は人々の日常生活に根強く浸透している。

しかし、今の時代は高齢者に対する周囲の態度が変わってきていると感じる。筆者が老人問題に対して関心を持ったのも、「道で倒れた老人を助けるべきかどうか」が議論の対象になるほどに、人々の意識が変化していることに疑問を感じたからである。この問題は道徳性だけでなく、社会福祉や法律規範にも関係する。また、老人自身の道徳意識や社会全体の敬老精神が薄くなったこと、あるいは核家族の影響で、親孝行の観念が薄くなったこととも関係する。

伝統社会においては高齢者が、経験豊富で、徳の高い、人望のある者として尊重された。現在でもこのような賢者のイメージにふさわしい老人像が社会から期待されている。しかし、時代の転換に伴い人々の価値観が変容し、高齢者自身の自己観、家族の親孝行観、社会の高齢者観などが従来のもとは大きく異なってきている。そこで、現代中国の高齢者問題についてももう一度検討してみようと思う。

## 第一章 中国高齢化社会の現状

現在、中国では急速に高齢化が進み、2015年の人口調査によると、60歳以上の人口は約2.1億人で、人口全体の15.5%を占める。このままで行くと、2030年に高齢者が3億人に膨らむと予測されている<sup>1)</sup>。

70年代以後、社会経済の繁栄を図るために、人口増加の抑制政策が実施された。その政策の下で、人口の増加が抑えられる一方で、人口の年齢構造にも変化がもたらされた。一人っ子政策を実施して30年の間に少子化がより加速した。

中国はこうした少子化を伴いつつ、高齢化社会に突入した。人口高齢化は経

経済発展を伴いながら進行するのが理想である。日本などの先進国は高齢化社会に入るまでに十分に経済発展を遂げた。しかし、中国では「未富先老」という言葉が示すように、国が豊かになる前にすでに高齢化が進んだので、国民年金、国民健康保険といった公的社会保障や福祉制度がまだ十分に整備されておらず、養老問題、介護問題、医療問題、福祉問題、自殺問題など、さまざまな高齢者問題が生じた。

改革開放政策の実施以降、市場経済への転換に伴い、人々の間で収入格差が激しくなって、人々の価値観も大きく変わった。中国の社会学者許紀霖は、この変化を「欲望の解放による自我の拡張」として捉え、また、自我の拡張が「自我を中心とし、物欲を追求する、公共的責任を放棄した利己主義」<sup>2)</sup>になると指摘する。多様な価値観を受け入れることは重要であるが、上文に指摘されるように、自己意識の高まりによって、自身の望むように、物質的満足を追求する一方で、自己の道徳の自律性が重視されていないように思われる。私的利益を追求する時、道徳的自主性を持つことが重要である。物欲主義的な価値観は、老人問題に対する認識にも影響を及ぼした。物欲や消費が重視される社会では、高齢者の経済的貢献度は低いので、その社会的地位も後退せざるを得ない。

また、一人っ子政策による核家族化の影響で、従来の集団サポート体制が崩壊した。そのうえ、社会福祉保障や有効な援助体制がまだ整っていないから、高齢者の扶養責任を家族が負わざるを得ない。出稼ぎに出た子どもは仕事などで時間的余裕がないから、親の扶養に手が回らない状態が続いている。残された老人は経済的支援や生活面でのサポートや精神的な慰めの欠如などの問題を抱えている。

## 第二章 高齢者観への影響

上述のように、近代化により、物欲主義、自我主義など価値観の変化も高齢

者観に影響を与える。中国における高齢化研究はまだ始まったばかりの段階であるゆえに、アメリカ学者の近代化と高齢者観にかかわる研究はどうなっているのかを見てみよう。これらには中国の高齢化社会の現状に当てはまる部分も含まれる。コウギルとホームズは、「老化と近代化の理論」を主張した。すなわち、「安定した社会では経験が貴重であることから高齢者の地位が高いが、変化の激しい近代社会では、柔軟性や順応力が重視されるから、高齢者の地位が低くなる」<sup>3)</sup>と。この理論から、現代社会では、高齢者に対し、人々の態度が否定的になる傾向があることがわかる。

バトラーも、高齢者に対する根深い偏見としてエイジズムの問題点を指摘する。すなわち、「高齢者が一定の年齢に達すると、心理的、身体的、社会的状態如何に関わらず、生産の従事者と消費者から扶養される者として高齢者をみるものである」<sup>4)</sup>。確かに、われわれは、医療保健、年金などの公的サービスを受ける対象として高齢者を必然的にみている。高齢者はいわゆる「社会に依存する存在」である。この限りでは高齢者の社会的位置づけが積極的に問題にされることはない。

バトラーは、「社会福祉の充実を、高齢者への思いやりを高めることに限定したら、高齢者を弱者として、社会に依存する存在と位置づけて見る傾向が強くなり、年齢差別をより強化していく」<sup>5)</sup>と指摘する。この指摘は的を射ている。高齢者に対する「エイジズム」がすでにかなり浸透しているのは事実であるが、高齢者からすれば、なるべく依存的な存在になりたくない、自分の尊厳を守りたい、そして社会から排除されずに社会に貢献できる自立的な人間でありたいというのが本音である。とすれば高齢者に対する公的イメージと私的イメージの対立をいかに緩和するかが問題となる。

### 第三章 高齢者の諸問題

#### 1) 高齢者の自殺願望

先述したように、中国では、所得保障制度が不十分な中で急速な高齢化が進んだために、とりわけ農村で深刻な高齢者貧困問題が生じた。農村地域での高齢者の自殺状況は都市部のそれよりも深刻である。農村の高齢者たちは一生耕作して生活するから、年金がない。そして彼らは、基本的な健康医療保険もなく、もし病気で体が不自由になってもお金がないし、面倒を見てくれる人が周りにいないので、孤独感や絶望感に陥り、最終的に自殺を選ぶ高齢者が多いのである。都市部での自殺率は農村部と比べて高くないが、高齢者の心理的問題は両者に共通する。

経済的な保障制度の不備は、高齢者の安定した老後生活を妨げる主要因に違いないが、このほかに文化的要因も考えられる。子どもに対する養育方針、特に結婚や孫の世話に対する中国式の親の考え方について分析しようと思う。

一つは家庭のなかで、子どもへの支出が親の老後生活の質に大きな影響を与える。特に、子ども教育や子どもの結婚費用の過度の支出は、親にとって大きな負担となる。また、親たちが結婚した子どもの住宅購入費用を負担することも少なくない。その背後に、面子を大切にする中国ならではの面子主義も関連していると思われる。特にお金にかかわる場合に、この見栄っ張りの心理が強力になる。加えて、近年、親に頼って生計を維持している若者が増加していることである。これらの諸要因が高齢者の生活に重くのしかかっている。

また、高齢者は自分の子どもだけでなく、孫の面倒を見ることも少なくない。孫を可愛がる高齢者は、自分たちの暮らしの質よりも、孫のために惜しみなくお金を使う傾向がある。中国では夫婦共働きが大半で、孫が自立する前までの世話の大部分は祖父母が担ってきた。しかし、孫の面倒を見ていた祖父母が、孫の成長とともに役割を失い、孫がいったん離れたら寂しくなって、うつ

になることもある。退職、配偶者の死、子どもや孫離れなどの喪失体験により、高齢者はうつ病となり、極端の場合、自殺を図ることもある。

さらに他の要因も考えられる。日本などの先進国のように、年金や保険に頼って老後生活を送るのとは異なり、中国では、儒教の「孝」文化の影響により、伝統的に家族による高齢者扶養が一般的に行われる。親世代は子世代が出世すれば老後が保障される。つまり、子どもの養育は、老後生活のための先行投資になると考えられている。しかし最近の若者においては、高齢者を大切にする意識がだんだんと薄れている。また、現実問題として、自分の老後生活を国や社会保障制度に安心して任せられるような状況でもない。さらに、その根源として、市場経済の時代から社会価値観が大きく変わって、儒教文化が急速に崩壊したからである。

### 2)倒れた老人問題

近年、中国で高齢者に関わる話題のうち特に注目されているのは、「倒れた老人」に関する問題である。2014年1月、新華通信社ウェブサイトで、街中で転んだ老人を助けるかどうかという問題に関して、アンケート調査が実施されたが、13万人の投票者のうち「助ける」という回答はわずか4%だった。この結果にもっとも影響を与えたのは2006年に南京市で起きた彭宇事件である。

中国青年報の報道<sup>6)</sup>によると、2006年11月20日、南京市のバス停で、64歳の女性・徐寿蘭さんが転倒し負傷した。バスから降りてきた彭宇青年が助け起こしてあげた。そして、彭さんは徐さん及びその家族と一緒に病院に行った。ところが後に徐さんが骨折しており、数万元もの高額な治療費が必要なことが判明し、その支払いをめぐる裁判となった。裁判所は、治療費など4万5000元の支払いを彭宇さんに命じた。両者は二審が始まる前に、彭さんが徐さんに

1万円を支払うことで和解した。その条件については明らかにされていない。双方はこの件に関する一切の情報をメディアに明かさないことを取り決めた。この話が後にメディアに取り上げられ、ネットで世間の注目を集めた。

その後も、老人を助けた人が、後で非難され訴えられる事件が相次いで起こった。一連の類似の事件がメディアに多数報道されたため、「倒れている老人を手助けするとロクなことにならない」というイメージが固まってしまった。中国では医療保険がまだ完全に整備されていないので、何の医療保障も得られない人が少なからず存在する。一旦、老人が転んで骨折したら、治療費が非常に高く、多くのお金を支払わなければならない。そのために老人が、自分を助けてくれた恩人を悪者にして、治療費を負担させようとしたのも頷ける。たとえ誣告に失敗しても、老人が払う代償は少なく、ただその良心が非難されるだけだからである。もともと現代社会には信用危機が存在していたが、こういった一連の事件の影響で、老人に対する不信感が強くなり、「倒れた老人は助けてはいけない」という認識が社会に広く浸透した。

では、ここで助けてくれた人を悪者にする高齢者の心理とはいかなるものか。その心理を分析すると、高額な治療費を要求されることへの恐れのほか、社会的弱者として扱われたいという甘えの心理を見て取ることができる。この高齢者は弱者の立場に身を置きつつも、逆にその立場を利用して、自分の欲求実現を図っている。仮に誣告に失敗しても、弱者としては社会から寛容されやすい。しかし、社会の寛容にも制限があり、高齢者がいわゆる「年寄り風を吹かせて威張る」ような行動をとれば、特に若者から猛反発を浴びるのは必定である。この反発の声がマスメディアによってさらに増幅され、結果的に高齢者全体イメージに対して悪影響を及ぼしたと考えられる。むろん、この事件において、医療保険の不備や不当な判決などの社会的要因も重要であるが、老人の側にも、いかなる老年を達成すべきかといった問題がある。こうしたモラルの間



題は、老人自身による道徳救済を要求することになる。

### 3) 悪徳商法の問題

老人を狙った悪徳商法のうち、特に高価な健康食品を売りつける事件が多発している。例えば、店員たちが直接に高齢者の自宅を訪問し、親しげに話しかけたり、話を聞いたり、彼らを油断させ、巧みな話術で高価な商品を売りつける場合もある。子どもが老親の被害を防止しようとしても、老親の店員への信頼感は根強く、容易に断ち切ることができない。老親は子どもの意見に耳を傾けないばかりか、逆に子どもを詰ったりするのである。

核家族化の進行で、子どもたちは親と付き合う時間が少なくなっている。それゆえ、同じ地域に住んでいる高齢者たちの付き合いが大きな役割を果たす。同じ趣味を持つ者同士と話したり活動したりすることで、子ども離れの寂しさが和らぎ、老後生活の充実感が取り戻される。

過去計画経済の時代には勤務先を同じくする人々がほぼ同じ地域に住み、相互に接触する機会も多かった。経済格差もほとんどなく、互いに理解し、助け合って生活し、集団への帰属感も強くなった。しかし市場経済政策の実施により、不動産が自由に売買できるようになり、計画経済時代の集団が崩壊し、同じ地域に住む人々の帰属感や安心感、また相互信頼や相互扶助の意識が薄れた。

なかでも都市化が急速に進む地域は深刻である。都市化によって元の住民間の社会的ネットワークが断ち切られ、新たな人間関係を作ることが求められる。しかしこのような社会環境の変化に、活動範囲が制限される高齢者が対応するのは容易でない。したがって、新たに形成された友人関係は高齢者にとってより大切である。高齢者は、趣味活動から楽しさや生活の充実感が得られるので、より頻繁に参加するようになる。そしてこの活動に重きを置くようになればなるほど、そこで形成されるネットワークが高齢者自身の生活の中でより重要な

位置を占めるようになる。過去の時代に見られた、同じ集団に所属することへの安心感や帰属感が、この新しい関係の中で見いだすことができる。この社会的ネットワークを深めるため、高齢者同士のコミュニケーションがより活発になり、コミュニケーションによって人々の心が繋がりがやすくなる。さらにこのコミュニケーションが、高齢者の中で情報獲得の主な手段となる。

それゆえこの関係の中の一人が健康食品の悪質な罠にかかる、その人に悪意がなくても、この高齢者同士のネットワークに対する信頼感と帰属感のゆえに、より多くの高齢者が悪徳商法に巻き込まれることになる。しかし、このネットワーク自体はむしろ重要である。なぜなら孤独で理解されない高齢者にとって、同じ趣味を持ち、同じ時代を共有する仲間との付き合いは、精神的な慰めであり、自己実現を可能にするからである。いずれにしても、高齢者がこうした被害にあわないようにしなければならない。そのためには法律や制度の完備だけでなく、高齢者自身の孤独感と交友関係につけこんだ悪徳商法を阻止することも喫緊の課題である。

#### 4) 家庭養老の問題

「孝」は伝統文化の中で最も重要なものである。「孝」という文字が、子が老人を背負う形からなるように、昔から子どもの養育は老後対策であるという考え方、つまり「養児防老」という伝統的な考え方が根強い。昔の祖先からの教訓や人生経験を重視する老人がこうした観念を捨てるのは容易ではないので、子どもへの依存心は強いとも言える。

ところが、中国の高度経済成長や社会の激しい変化に伴い、人の社会意識に大きな変化が起こった。経済体制の市場経済改革によって、消費水準や経済貢献度が低い高齢者の社会的地位も低くなった。封建社会においては、老人と子どもとの間の信頼関係は相互的であった。しかし、市場経済の発展に伴って、子

どもから老人への依存心が弱まる一方で、老人から子どもへの依存心は強まった。

また、高齢者扶養を対象とする社会福祉サービスへの政府の取り組みが相対的に立ち遅れている。経済発展優先主義を維持するために、家族の責任がより強調されている。「中国高齢者權益保障法」の改正法において、特に両親に対する子どもの扶養義務が強化された。改正法の新しい項目において、「親元にたびたび戻り世話をする」ことが子どもの義務として規定された。さらに、子どもが扶養義務を果たさない場合、法的責任も強化された。

改正法から、深刻化しつつある高齢者扶養問題に関して、家族責任を強化しようとする政策狙いが垣間見える。高齢者のケア問題に対応するため、社会福祉サービスの向上よりも、伝統に従って家族の扶養責任を強化している。しかし、家族責任の強化は、逆の意味で高齢者福祉施設の整備を遅らせる結果となる。中国社会では高齢者福祉施設への入所を、家族の扶養放棄とみなす傾向がある。高齢者福祉施設に対する抵抗心理は依然として根強い。

この法改正を受け、大きな議論がかわされた。道徳に訴えても解決できそうにない深刻な親不孝の問題が存在するのも事実である。親孝行を果たさない者に対して具体的な制裁を示したとしても、執行することが難しく、結局家族関係の倫理的規範を示しただけだとみる。儒教思想から見ると、「孝」は人間の感情に根ざす自然的なものなので、親孝行の問題を法律で縛るのではなく、人々の自覚に委ねるべきである。よってこれは道徳レベルの問題だとされる。この法律はある程度、宣言的な意味が強いと言える。しかし、現代社会でどのように老人の老後生活の自主や独立の思想を覚醒させて、平等が基本的な価値理念である現代家庭にいかにして「孝」の価値を浸透させるかは検討の余地がある。

## 第四章 高齢者問題への対策

高齢者の生活に関連する社会保障制度は、まだ高齢化社会に対応することができずにさまざまな問題を抱えるので、改革されなければならない。まずは法律の整備が立ち遅れ、体系的な法律がまだできておらず、各部門の実施、管理、監督が統一されていない。法律で社会保障権として、老齢の場合に物的援助を受ける権利などが定められているが、個別の成文法によってなされていないため、その具体的な実施に当たっては混乱が生じる。議論をしても事が決まらず、事が決まっても実行されない現象が起こる。加えて、監督制度も欠如している。各部門が自分の方法で決め、資金を徴収したあと勝手に他の目的で使うこともある。このような制度的な問題の解決は非常に複雑なので、ほかの角度からも考えなければならない。

### 1) ソーシャルサポートの充実

ソーシャルサポートは、高齢者の孤独を低下させ、幸福感、QOLを向上させる手段として研究される。人と人の助け合いを促すソーシャルサポートの明確な定義はないが、これがいろいろな働きや効果をもたらすことが指摘されている。ソーシャルサポートには主に、問題解決のための情報や技術を提供し、経済的な援助を行うなど手段的サポートと、情緒的なサポートとがある。特に、情緒的なサポートは高齢者の心身健康や生活満足度にかかわる。相手に愛や同情や理解を示す、安心感を与える、気を配るなど、相手を精神的に支え、慰めることを中心とする。高齢者に社会生活において尊敬され、理解されていると感じさせ、病気や死亡への不安感や孤独感から彼らを解放させる。悪徳商法に遭遇しても、騙されたことからくる精神的なショックを緩和させる。

実際の扶養状況から見れば、経済面や生活面よりも精神面での扶養はより複雑な問題で、実行することも難しい。特に家族や近隣からのサポートは情緒的

サポートにおいて重要な地位を占める。近代社会では家族や近隣などの伝統的な人間関係は大きく変化した。家族関係では、子どもと親の交流が減少し、また、親は伝統文化の影響で子どものために、家族の「和」のために、自分の感情を抑えることができて、子どもは親孝行を義務と弁えていても、必ずしも親の言葉に従順なわけではない。親子関係に葛藤や摩擦が生じている。また、近隣関係では、昔ながらの温情や親切を求めるよりも、利害関係に巻き込まれて損をしたくないという心理がより強くなっている。人との付き合いにおいても理性的な計算が含まれるようになっていく。総じて、社会関係において、人情が希薄になりつつある。したがって、高齢者に対する情緒的サポートも難しい問題となる。

## 2) 役割喪失からの充実感の獲得

ロソーの『高齢者の社会学』によると、「子どもの家離れ、配偶者の喪失、退職などにより、高齢者の老後生活では、家族役割や職業役割から疎外されるという役割喪失」が起こる。また「健康的衰えなど、自立そのものを難しくすることによって生じる役割喪失」もある。すなわち、責任の減少と機能の制限により、結果的に役割が曖昧になる。「高齢者の役割は柔軟で開放的で、構造化されていないので、それは最大限の個人的な好みと各人の選択によって定義されるといってもよい」<sup>7)</sup>と。しかし高齢者は、「役割が構造化されていない高齢期では、自分の役割を自分で決めなければならないので役割が不安定になりやすい。また社会的期待がなく、自分たちのための確立した規範が欠如している中で、私的な規準を作り出さなければならない」<sup>8)</sup>と。つまり、高齢者の老後生活における個人の自由が提唱される一方で、高齢者の役割はますます曖昧になっている。

退職後、高齢者は社会的役割の後退によって喪失感が生じる。それは、この

後の時期に対する規範や責任が曖昧なので、これまでの社会的役割に代わる新たな役割作りを予め準備するのが難しいからだ。社会的役割の喪失に直面した高齢者の態度は様々である。高齢者の生き方にも個人差があるのである。高齢者自身がどのようにこのことを認識し、役割の喪失感からどのように生きがいの実現を追求することが重要である。

具体的に中国の場合を考えてみると、現在中国の老人の退職後において重要な役割の一つが孫の世話である。孫の世話をすることで、都市部はともかく、農村で生計のために畑仕事をせざるを得ない老人も孫の世話を大事にする。現在の高齢者世代は、第二次世界大戦、文化大革命など激動の時代を生きてきたので、国家の発展や繁栄、そして未来の世代によりよい生活をもたらすことに使命感をもち、数々の苦難にひたすら耐え続け、真面目に仕事をこなしてきた。それゆえ社会的な貢献や奉仕意識が高い。さらに仕事を全うすることで、社会貢献が実感され、充実した人生や生活を送ることができるので、なおさら社会への貢献や奉仕意識が強い。こうした社会意識は、退職後も過去の充実感を想起させ、幸福感や満足感につながると同時に、現在の生活にも生かせる。孫の世話は、この貢献や奉仕意識からの転換を意味する。こうしたパーソナリティー形成のために老後生活における自由や多様性の必要性が説かれている。しかし、中国ではまだ孫の世話という役割が中心なので、この自由は制限されているかもしれない。さらに、孫の世話の役割が完成された以後にいかなる再びの喪失感からの充実感を獲得するのが重要である。

### 3) 徳の涵養の勧め

高齢者に対する公的なイメージをもう一度確認したうえで、高齢者が自身に対して持つ私的なイメージを検討したいと思っている。ケクロの『老年について』はこの問題を深く分析している。具体的に、一般に老年は惨めなものとし

て捉えられがちであるが、キケロは老年をポジティブに評価し享受する。老人は、失われた若者の体力をなげく必要はなく、加齢によって育まれた見識と権威と思慮を発揮することで、充実した現在を生きることができる。そして、キケロは次のようにいう。「老年を守るに最もふさわしい武器は、諸々の徳を身につけ実践することである。生涯にわたって徳が涵養されたなら、長く深く生きた暁に、徳は驚くべき果実をもたらしてくれる。徳は、その人の末期においてさえ、その人を捨てて去ることはないばかりか—それが徳の最も重要な意義ではある—人生を善く生きたという意識と、多くのことを徳をもって行ったという思い出ほど喜ばしいことはないのだから」<sup>9)</sup>と。こうしてキケロは徳の涵養の重要性を指摘する。

前述の倒れた老人の問題では、社会から弱者として扱われる偏見を受け入れる反面、弱者としての立場を利用しようとする心理が、誣告しようとする老人に働いている。キケロが提唱するように、このような消極的な老年生活ではなく、ポジティブな視点から老年生活をもう一度見直し、弱者とされる否定的な偏見から抜け出て、高齢者としての自信や自尊心をもって道徳を身につけ、道徳を実践することが肝要である。

## おわりに

一人っ子政策により急速に高齢化が進展し、中国社会はさまざまな高齢化問題に直面している。経済発展に伴う政府主導の一連の積極政策によって、また医療保険制度や社会福祉の完全化によって、こうした高齢化問題を解決できるかもしれない。しかし、現在の中国社会では、市場経済が確立した後、社会価値観が大きく変化してしまった。欲望解放と利益追求が社会全体の雰囲気となり、高齢者がこの都市化の流れになかなかついて行けず、社会貢献度も低いため、ますます社会下位集団になりつつある。それゆえ高齢者に対する社会的イ

メージと自己イメージとの食い違いが生じるのである。敬老文化や「孝」の文化は昔から中国の主流文化であるが、核家族の進行で子どもと高齢者の交流が少なくなり、高齢者への情緒的なサポートが低下している。また、高齢者自身の役割も曖昧で不明確なために、彼らが自己価値を実現し精神的充実感を得ることもできない。そこで、帰属感のある集団が自分を支持してくれると同時に集団への忠誠心も重要になるが、この関係を逆手にとった不法行為に注意する必要がある。また、伝統文化における老い像は徳の高い、知恵のある賢者であるので、社会も高齢者をいつでも善い人とみなしがちである。しかし現代社会には悪い高齢者もいて、その行為が社会に少なからず影響を与えている。このような一部の事例は、伝統的な善い老い像を根底から覆すことになる。そのため時代の変化に応じて、高齢者がみずから新たな自己イメージを構築し、また社会も高齢者に対して明確な規範と適切な認知を与えることが重要である。

## 註

- 1) 中国国家统计局編『中国統計年鑑(2015年度版)』
- 2) 許紀霖「自己の消滅:現代中国個人主義思想の変遷」『中国社会科学』(第26号) 2009年 p.5
- 3) 古谷野亘・安藤孝敏『新社会老年学』(株)ワールドプランニング 2003年 p. 20
- 4) Butler R.N., Productive Aging, 1975. 岡本祐三(訳)『プロダクティブ・エイジング』日本評論社 1998年p. 27
- 5) 同書 p. 29
- 6) <http://www.chinanews.com/fz/2012/01-16/3607237.shtml> (中国青年報2012年01月17日「彭宇事件に対する反省」)
- 7) Irving Rosow, Socialization to Old Age, 1974. 嵯峨座晴夫(監訳)『高齢者の社会学』早稲田大学出版部 1983年 p. 114
- 8) 同書 p. 115
- 9) キケロ 中務哲郎(訳)『老年について』岩波文庫 2004年